



刊日二月五
行發日二月五
(刊休日翌日祭曜日)
香八五五六〇

天氣豫報
東風の暴風雨
南西の風
次第によし

磐城の獅子舞研究(三)

山口 彌一郎

7. 行列及び獅子舞
獅子舞は笠をさへ、行列と言ふと二十五、六歳の若者
獅子舞奉納、再び行列、他二十七、八歳の頭、二十九
最後は笠のさげで終る。笠をさげを師匠が務めて附
ろへの場所より獅子舞奉納、若者頭が務めて、し
所まの往復、其の他各師匠の言ふの如く、同下平
社、民家を知る場合の行列にもある。棒は一般には
は総べて番習に依る配列順尾につくが、飯野村白土
が定まつてをり、笛や太鼓にては弓持ちが先導となり
で獅子を合せ、高久村八幡次に刀二人、花籠二人、木
の如きは「さのさのさ」と太刀二人がしる前に出て
獅子を立て静々と進む。一般終りは「さのさのさ」二入を
に単に行列と呼ぶが平市師匠がかり、最後は「役
中平直にては之を「ぶつたなし」即ち世話人がつく。
て」と言つてゐる。内郷村小名取町諏訪神社にては世
高坂にては清光寺より住吉話人が先導となり、花籠と
神社に至る行列には、古くは子供が四人二組になりそ
時の地頭井上河内守並に内れに續き、し、お囃子、
藤備後守より鶴貫詞ありと笛、太鼓、つづみ、棒二十
て先頭に井上、内藤兩家の五人、最後が若者である。
紋所入の長旗をたて順次師匠若し神樂と、若し混じてあ
匠一人、中老人一人、花籠四人は飯野村上高久の如
人、第四人、笠拂ひ二人、く神樂が先導となり幹部、
さ、ら即ち若者一人、白布高張一、棒、花笠一、
紅布を附し、弓を持つて若し、花笠役無しと續き、
二人、獅子三人、刀、小太平市下平直の例をみるも神
刀、棒を持つて若者十数人、樂を入れた箱即ち神樂を
最後は磐固がつく、し、の持つて若者先導となり、若
順序は何れにても此し、若七、八人、次が社總代、
中し、仕の順席に、區長、若籠、し、し、つづ
らふ。平市中平直北野神社、頭、後見、最後はまか
にては先導を神官が務め、「さのさのさ」が一人つく。
區長、社總代、花籠二つ、現在では之等の資料を整理
し、三人、笛六人より十八人も容易に古い形式を登
位、續いて頭下と稱する二見する事は困難であるが、

聞鈴木榮翁養病
(其の一)
康健元如鐵
何縁二登夜
回春應有近
只要戒心深
5月3日
△和田合歌(建保
元)△歌麿放す
(文化)△皇軍台
見庄占領(昭和一三)

恩讐無道
久我莊多郎
香川三十代書
(89)
「地」の巻一
かげらふ(七)
長谷川町へ向いてかけて
ある馬車は気がついて、
車載は、
「おい、三五郎」
と、取者の脊へ呼びかけ
「へえ」
振向いた顔に、どこやら
見覚えがあると思ふと、
これは、お樂の腰巾着だつ
たさそりの三五郎である。
これである、三五郎は今
でもお樂の傍にゐるのら
「日那、何か……」
「うむ」
車載は、暗闇な顔で動か
して、
「長谷川町へ行くには及ば
ん、横濱へやれ、今日はこ
のま、スツと歸るのだ」
「へえ」
三五郎は、またこちらへ



平屋賣店
靈峰羊かん(名産楠煉)
磐城の御みやげ品
女中さん
至急雇入たし
給料其他委細面談
謹告
平市大工組合
日本姓名學會東北支部長
鷗沼孝昌
平市紺屋町 三六

玉屋眼鏡店
北川外科
外科一般 内臓外科
レントゲン科 泌尿器科
夜

富岡株式会社
富岡株式商店
小瀧は招く
新車のお知らせ
三七七型フォード
スミタキクシ

万織田材木商店
天井板、ベニヤ板買ふなら
確かに御期待に添ふ良品廉價の

鈴木醫院
開院
鈴木齒科醫院
皮膚科
泌尿器科
性病科
産婦人科
井坂醫院

平病院
鈴木定藏
鈴木定藏
鈴木定藏

